

オルガノン第6版が出版された経緯

1842年2月ごろ、ハーネマンが86歳の時に、オルガノンの第6版を完成させた。第6版の出版は間近で、完成まであと一歩とハーネマン自身は考えていた。ハーネマンは、この第6版のオルガノンに書かれていること（特にLMポテンシーに対して）を、親友で弟子でもあるボーニングハウゼンなどの同僚たちに手紙を通して知らせていた。ハーネマンは、ドイツだけでなくフランスでも第6版を出版しようとしていたと手紙に書かれていたことが分かっているが、残念なことに、彼は1843年の7月2日にパリで亡くなり、彼の2番目の妻メラニー(Melanie)・ハーネマンがオルガノンの原本の管理者として託された。メラニーは、ハーネマンの死の数年前にソフィーという5歳の女の子を養子にもらっている。

1856年6月に、ボーニングハウゼンはメラニーに、ハーネマンの貴重な仕事を出版するように、人類のためにオルガノン第6版の重要性を世に知らせるようにと話している。

その間、メラニーは公的資格がないにも関わらず医療行為をしたとして、裁判を受けていた。彼女は自分自身とまだ小さなソフィーのために、自分たちの安定した将来の保証が必要であった。ソフィーが大きくなると、メラニーはボーニングハウゼンの息子でホメオパスであるカールと結婚させたがった。ボーニングハウゼンはその結婚に最初は躊躇していたが、のちに二人の結婚を認めている。

メラニーは、第6版をすぐにでも出版し、ハーネマンが作ったレメディのサンプルをボーニングハウゼンに引き渡すと話すと、ボーニングハウゼンは非常に喜び、このニュースを同僚に伝えた。そのことはボーニングハウゼンの同意なしに、センセーショナルなニュースとして有名な専門誌「Allgemeine Hom. Zeitung」に1856年8月29日に記載されることとなった。

するとメラニーは激怒し、このことがきっかけでメラニーとボーニングハウゼンの間に誤解が生じ、メラニーは公的にボーニングハウゼンを非難した。それにも関わらず、1857年にソフィーとカールは強く結ばれ、メラニーとともに夫婦としてパリに住むことになった。メラニーは約束を守らず、第6版についてはこれ以降何も音沙汰なしで、ボーニングハウゼンにハーネマンのレメディのサンプルが渡ることもなかった。

1865年に、アメリー (Amalie ハーネマンの娘) の息子であり、ハーネマンの孫であるレオポルド・ハーネマンが有名な専門誌に、第6版を出版すると宣言した。メラニーは激怒し、出版されるのはどの版でもなく、本物でもないと訴えた。また本物の原稿を持っ

ているのは自分であって、法的に自分のみが第6版を出版でき、近いうちに出版すると公的に言った。

メラニーの脅迫的な物言いに対して、レオポルドは、これは雑誌の「6」と「5」の誤植である、と専門誌に話している。彼が実際に出版しようとしていたのは、絶版になった「第5版」の再出版であるが、これが間違っ「第6版」と誤植された、彼は第5版を法的に再出版できる権利があり、第5版は彼の叔母であるルイーズから受け継いだものであると言っている。

しかしながら、のちになってレオポルドは「the British Journal of Homeopathy」(1865年のVol. 23の422ページ目)に、自分はオルガノンを出版するつもりはない、自分が本当にしたかったことはメラニーを興奮させて「第6版を出版する」と彼女に言わせることだった、彼女は20年以上も第6版について何もしていないではないかと話している。このことから、メラニーは様々な世界中の有名なホメオパス、ヘリング、ダナム、Bayes、ウィルソン、キャンベルなどから第6版を出版するようにと言われるようになったので、レオポルドのこの試みはある程度成功したと言える。

メラニーは出版に関して50,000ドルを要求した。これは現在で換算すると、インドルピーで6300万と同等である！(円でも1億くらい？！)これは本1冊にしては莫大な金額の要求で、誰も払える者はいなかった。

1870～71年頃には、カールとソフィーが普仏戦争によりメラニーと一緒にドイツを去り、第6版の原稿を含む全てのハーネマンの書物を保護するために持ち去った。その後メラニーは再びドイツに戻り、数年後の1878年5月27日に亡くなっている。メラニーの死後、ボーニングハウゼン家がその財産を受け継いだ。ソフィーは様々なホメオパスと第6版の出版について話し合いを続けていった。1880年ごろ、彼女は25000ドルの第6版の印税を要求した。今日に換算するとインドルピーで5030万ルピーである！この金額も、本1冊にしては多額で、ホメオパスはオルガノンの興味を失っていった。

1897年に、アメリカのフィラデルフィアのハーネマンカレッジの生徒であったRichard Haehlが興味を持ち、第6版を出版したいと思った。第6版のオリジナル原稿とそれにまつわる記録物を出版しようと奮闘した。彼はソフィーと頻繁に手紙のやり取りをし、出版の交渉した。そして1900年に、ボーニングハウゼン家族が住む、ドイツとオランダの国境近くのDarupでソフィーを訪ねた。しかし、そこでソフィーは昨年亡くなったと知らされた。彼は夫のカールと交渉しようとしたが、数年後にカールも亡くなり、その夫婦に子供はいなかった。1906年、Haehlは再び、友であるボリケと一緒にサンフランシス

コからドイツの Darup まで旅をした。彼らはハーネマンの書物、特に「Hahnemann's casebooks」とオルガノン第6版を獲得しようとしたが失敗した。

ハーネマンの遺稿の所有は様々に変わった。1914～1918年、第一次世界大戦が起こり、人々の国から国への移動が困難になった。Haehl はほとんど希望を失っていたが、ボリケの経済的援助により、1921年にボーニングハウゼン家から、第6版の原稿を含むハーネマンの完全な遺稿を、1000ドルで得ることができた。

1921年12月にまでにボリケによって英語に翻訳され、翌年の1922年にボリケとTafelによって出版された。第6版はほぼ80年間、公にならないままだったが、Haehlとボリケの不屈の努力によって遂に日の目を見た。

その間、原稿とcasebooks of Hahnemannが2回ほど喪失する危機があった。1回目が1870～71年の普仏戦争のパリでの攻撃においてであり、2回目が第一次世界大戦時であった。Haehlとボリケに感謝である。今年（2022年）は、失われた宝である第6版が出版された100周年記念の年である。二人のホメオパシーへの多大なる貢献と絶え間ない努力に敬意を表する。

※「How the 6th Edition of the Organon Came to be Published」
by Rachna Srivastava から少し簡略して引用

<https://hpathy.com/homeopathy-papers/how-the-6th-edition-of-the-organon-came-to-be-published/>